A - 幻想と仮面の英雄 -

秋永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ａ‐幻想と仮面の英雄‐

【Ｎコード】

Ｎ２１５５Ｏ

【作者名】

秋永

【あらすじ】

仮面ライダーＡＧＩＴΩ（アギト）の世界において、最初の犠牲者である未覚醒のＡＧＩＴΩ【木野雄理（キノユウリ）】は、高校時代の気の合う友人に再開する……それは、彼の【終わり】であり、そして全ての【始まり】だった……男は今、風と成る

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　【男の終わりと始まり】（前書き）

えぇ……始まりました、Ｗシリーズの最新作、第三期【Ａ-幻想と仮面の英雄-】です。
プロローグだけですが、お楽しみいただければ幸いです。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　【男の終わりと始まり】

夢……だと思う
暗い空間に浮かぶ、無数の泡を割ろうとする蟲から泡を守る為に、
無数の泡をそれらよりとても大きな泡で包む夢
泡を作り上がるにつれ、足の爪先からドンドンと感覚が無く／亡くなっていく
分かるのは、無くなった部分から自分という個が消えていく感覚
多分、これが【死ぬ】と言う感覚なんだろうと納得していく……
最後まで消えそうになった瞬間

「うわっ？！　ハァ……ハァ……夢……だったのか？」

俺こと【木野（キノ）　雄理（ユウリ）】の勤める大学病院の事務作業をするオフィスだった……だが、とても懐かしく、同時に大切な【ナニカ】を失ったような悲しみが流れ込んで来た
不覚にも、起きた日は父の命日だった

Ａ‐幻想と仮面の英雄‐

Ｓｉｄｅ－木野雄理

昨晩の夜勤を済ませ、緊急事態時に起こしに来てくれと看護士達に頼み、本当は良くないが、日頃貯まった肉体的、精神的疲労を回

復する為にオフィスに置いてあるソファーに寝っころがり、クッションを抱えて惰眠を貪っていた時に見た【夢】
あまりにもリアルであり、あまりにも喜劇のような悲劇にこめかみを抑えてしまう……トラックに轢かれたらダークでファンシーな世界に転生って、たまに担当の小児科にいるガキ共が聞かせる荒唐無稽な話じゃあるまいしと自分を夢を否定しながら納得し、冷蔵庫に常備された缶コーヒーを取り出し、プルトップを開けて飲み干すクリアになっていく思考には既に夢の事は無かった……

「さぁ～て、今日も一日頑張りますかぁ……ん？「木野先生！」へ？」

オフィスの出入口に、美しい顔を鬼のように歪めた看護長が居た……いや、若いからって無茶なシフトをぶち込まれた気遣ってくれる少ない人物だ
他の看護は、木野先生が居てくれるなら～とか言って豪快過ぎる医院長の方針に反対してくれない……虐めか？

「木野先生、今日の貴方のシフト……覚えてらっしゃいますか？」

「ちょ、ちょっと待ってくださいね……あ。」

ある事を思い出した……そう、雪山で遭難し、事故で死んだ父と過労で亡くなった母の命日だった
母は女手一つで育ててくれたが、俺が高校に上がる頃には、疲労と元々強くない体が祟って亡くなった

――――――――――――

――――――

―――

―

母の葬式の日、ある人物が俺の目の前に現れた……【木野(キノ)　薫(カオル)】

……薫叔父さんだ

父の兄であり、俺の叔父に当たる人物だ

雪山の遭難し、利き手を失った元医者でもあると母が自慢げに話していた

当日、少しでも母の負担を減らそうと奨学金が出るところを狙って受け、首席に滑り込み同然で合格した

大学に上がるまで、首席のポディションを守りつつに青春を謳歌するのは……いや、元々がり勉な連中ばかりの学校だから下らない事は出来なかった

そんな高校時代と大学時代を支援してくれた人物が薫叔父さんだった

不気味で、不適な笑いしか出来ない人だったが、不器用な人なんだと高校に上がったガキながら理解したものだ

「久しぶり……だな。」

「うん……」

「多分、身寄りの無いお前は俺が身元引受人になるだろう。」

「うん……」

―
―――
―――――
―――――――

今思えばかなり恥ずかしい……いや、本当に相当死んでいた会話している
その後、暫くは薫叔父さんのマンションに世話になっていたけど、高校一年の中期になると、バイトをするようになって、一人暮らしを初め、実質独り立ちしてしまった
学費は奨学金である
そんな彼を、止める者……ストッパーは居なかった為、仕事のシフトの事を忘れると今回みたいについ働きそうになってしまう

「全く、しっかり休んでくださいよ。」

「スイマセン……じゃ、お先失礼しますっ！！」

後の先生への引き継ぎ作業は看護長がやってくれるとの事だったので、眠気眼とすきっ腹を引きずって、病院を後にした

―――――――
―――――
―――

「くわぁ……ねんみ……」

街中を、目の下に濃い隈を刻まれている雄理が歩いている
夢遊病患者のような姿は、どこか……いや、明確的に周りがドン引いている

ｐｉｒｉｒｉ♪

「ん？　はい、へ？　ああ、久しぶりっ！　元気だったか？」

雄理の懐に入れていたＰＨＳが鳴り出す……病院からかと身構えていたが、それは裏切られた
それは、高校時代に知り合った男からだった
高校生にしてはやたら落ち着いた物腰で、豊かな感性の持ち主だった
彼のおかげで高校時代は退屈しないですんだと言える
もう一人……居たが、何故か名前を思い出せ無い
そして、彼の名前も……

「やあ、またせたかな？」

「いや、マジ久しぶりだなっ！　元気だったか？」

「ええ、それなりに……ね。」

もし……もしもの話ですが、貴方の友人が貴方を目の敵にし、貴方を殺してやりたいと思っていて、貴方がそれを分かっていたら、

貴方はその時……どうしますか？

―――――――――――――――――――――

昼時のレストラン街に来た雄理と友人……ペペロンチーノを心行くまで堪能し、身も心も満ちた状態で雄理は歩いていた

「それにしても……なんか昼時だってのに人居ないな……」

「ええ、私が人払いをしましたから。」

「へ？」

二人で歩いていたレストラン街……ペペロンチーノを食べた後、旨さで幸せで気が付かなかったが、人が居ない疎らとかでは無く【居ない】のだ

「スイマセン……貴方が裏切り者の【ギルス】であり、反逆者の【ＡＧＩＴΩ】で無ければ……ずっと……良き友人で居られたのに……残念です。」

「なっ？！　ギ……ガァ……ァ……」

「本当に……ごめんなさい……貴方には、悔やんでも悔やみ切れません……せめて、貴方の冥福を祈るばかりです。」

「ふざけ……が、あ……が……」

突如、尋常では無い力で首を閉められる雄理……頸動脈が絞まり、意識が消えていく……雄理を最後に占めた感情は……深い【悲しみ】だった

友に裏切られ、言われも無い罵倒を受けた悲しみだった……その内、意識は暗い……泥に沈んでいった

昼間のレストラン街で起きた絞殺死体のニュースは、一斉風靡したその日から、【不可能犯罪】と呼ばれるようになる事件が多発するようになった

～Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　Ｅｎｄ～

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　【男の終わりと始まり】（後書き）

次回予告

「（声が……出ないっ？！）」

「貴方は死んでしまったのです……それも、世界から否定されて。」

「ま、生きあがけってこったな。」

次回【男、幻想となる】

その時、極端なる進化の片鱗を見る

第一話　【男、幻想となる】

Ｓｉｄｅ－雄理

泥の中にいるようだった……

ここが、■■というものだろうか……

寒い

冷タい

痛イ

コワイ

……だが、泥の底から足を掴まれて動けない

本当に死んでしまったのか？

脳裏にはただ、死への恐怖と残して来た友や叔父への謝罪しかなかった……だが、唐突に救いは現れた

「お前ら、ソイツはまだ裁きを受けてないんだよ。　だから引っ張り込もうとするんじゃない。」

泥の中で一閃……刃の煌めきが救いに見えた

そして、俺は意識を閉ざした……

「おやおや、魂の衰弱がやばいねぇ……こりゃ持つかな？」

Ｓｉｄｅ－Ｏｕｔ

第一話　【男、幻想となる】

Ｓｉｄｅ－？？？

私は死神をやっているもんなんだが、今回拾った魂は奇妙な事この上ない

無縁塚と呼ばれる泥沼に墜ち、中に引きずり込まれた筈なのに、泥の上から何処にいるのか分かるくらい輝いていた

説教好きな上司に直接頼まれた仕事とは言え、何やらきな臭いねぇ……

「ん……ぐ……」

「おや？　目が覚めたみたいだね……自分で立てるかい？」

「……っ？！」

おやおや、かなり混乱しているみたいだ……暫くは退屈せずに済

みそうだ

Ｓｉｄｅ－Ｏｕｔ

△▽△▽△▽△▽

Ｓｉｄｅ－雄理

「（こ、声が出ないっ？！）」

息苦しい……としか形容しがたい場所で気を失ったら、気がついたら彼岸花が咲き乱れた場所に居た……真っ赤な華は、手術室や■■で見た体を追い出され、宙を舞う真っ赤な鮮血のようだった
そんな場所に、時代錯誤というのだろうか？　胸が開けた着物をき、美しい朱い髪を二つに束ね、波打ったような捩曲がった大鎌を持った女性が居た

「へぇ、意識を取り戻したら生前の姿をそのまま再取得出来るとは意外と意地汚い人生だったみたいだね？」
「……（意地汚いのは肯定せざる得ないが……駄目だ、声がでない。）」

声をだそうにも息が出ない、なにより呼吸をしている気がしない
心臓から血液が送り出される感覚がしない……まさかあの時、本当に

「アンタは死んだよ……おまけに、閻魔様から名指しでお呼出しだ。
アンタ、生前何をしたんだい？　ま、私の管轄外だから、後は上司の前で好きなだけ話し合ってくれ。　ほら、六文銭はいらないから早く乗ってくれ。」
「……コクン（くそ、マジか……マジで死んだのかよ俺。　なんでアイツに殺されたんだ……畜生、わからねぇ事ばかりだ……）」

女性に促されるまま船に乗る雄理……旅立った常識が帰って来ず、流れに黙殺される雄理……ただ、流れに流されるままだった

――――――――――――――――――――――――

船に揺られる事、数分……なんか越えてはいけない大きな川を越え、仰々しい門にたどり着いた

「さ、行きな……この門を越えた先に、アンタを待っているお方がいる。」
「……コクン（行くしかない……か、ええいなるようになれっ！）」

促されるまま、雄理は仰々しい門を……地獄門をくぐった

――――――――――――――――――――――――

中は、生前お世話にならなかった裁判所のようなところだった
物々しく、威厳に溢れ、そこに居るだけで畏れを感じる空間だった
ただ、そんな空間に不釣合いな存在がいた……それは

「はじめまして、貴方を見極める為に呼び出した、四季映姫という者です。」
「……（はぁ……そ、そうですか。）」

なんといか、ちんまい女の子だった
小さい女の子だった……大事な事なので二回言いました
礼儀正しいが、どこか垢抜けない印象を感じる
だが、『ブレない』揺るがない……■■で見た上に立つ連中のようで思わず生唾を飲み込んでしまう
危険は感じないが、彼女が自分を裁く者だと言われても自然と納得してしまう

「単刀直入に言いますと、貴方は死んでしまったのです……それも、世界から否定されて。　だから、私の部下……貴方を此処まで連れて来た『小町』に命じ、貴方を保護させていただきました。」
「……コクン（よく分からないけど、助かります。）」
「それから、貴方はただ保護した訳ではありませんよ？」
「……っ（どういう事だガッ？！）」

雑談的な雰囲気が一変……灼熱の業火に曝されたように息が出来ない
喉が痛い、胃がシクシクする……なのに自然と足がくじけない

揺るがない、頭が冴える、体の底から力が湧き上がる
業火に曝されているにも関わらず、心は……魂は鋼鉄のように揺るがなかった

「今、貴方に並の人間が消滅しかねない程の力をたたき付けていますが……やはり、上は貴方を認めたのにはそれ相応の資質があるそうですね。」
「……（ぐ、くぅ……話が知らないうちに進んでいる……もう、とっくに振り切られているというのか？）」

置いていかれているとかのレベルの話では既に無くなった為、簡単に何が起こったかまとめてみよう
・何故か割と暇な夜勤上げ
・久しぶりに合った友人に絞殺された
・気が付いたら泥沼に居た
・変な姉ちゃんに助けられた
・何故か、無茶苦茶な話をされている
・俺、人外になってしまった？←今此処
……ナニコレ、コワイ
ただ、友人に絞殺された時に裏切りだとか反逆だとか言っていたが……生憎だが、そんな過激な思想は無い
大学時代に少々■■に居たが、思想にのまれる程、真っ当な人間していなかった筈……まさか、居たから殺されたのだろうか？

「ああ、貴方の生き方そのものはまあ……真っ当かどうかは置いておき話しますが、問題ではないでしょう。」
「……っ？！（ならなんでっ！）」

裁判所の被告人が立つ場所で柵を乗り越えるように食いつく雄理
……自称一般人の彼には、友人に言われも無い罪状で絞殺されたの
が理解不能のようだ

「……まず、貴方は『ギルス』、もしくは『ＡＧＩＴΩ（アギト）』
と言う単語に聞き覚えはございますか？」
「……フルフル（いや、無いな。）」

実際に雄理『は』知らない……何故なら、知らずに生きて来たか
らだ
超能力なんて使えないし、未来予知なんて出来ない
強いて言うなら、悪運が人よりほんの少しだけ良く、幸運が天を仰
ぎ拍手する程に無いのだ
そんな彼は、『運』よりも『確率』を取り、生き残る為に必死に生
きて来た
主人公補正なんて付いていない、あるのは意地汚いと表される程の
根性と度胸のみだ……しかし、そんな雄理も信頼していた友人に不
意打ち気味に首を締められた故に訳も分からずに死んでしまった？
のだけど

「そうですか、知りませんか……まあ、それは何れ分かることです。
問題は……」
「……ゴクリ（も、問題？）」
「貴方が死んでいない事です。　死者蘇生……英語で言うところの
リザレクションです。　貴方は、一時的にこちらに来てるに過ぎま

せん……ほら、足を見てみなさい。　幽霊のように透けているでしょう？」
「っ？！（い、生きてるって……はぁっ？！）」

　気がつけば足の膝小僧まで消えており、意識が何となく遠退いていく……柵に手をかけて辛うじて意識を繋ぎ留めるが、それも無駄と言わんばかりに体は消滅して行く……
意識が反転するように、泥の中に居たような消えるような感覚ではなく、暖かい何かに包まれるように意識を閉ざした
ふと、雄理をこっそりと写した浄瑠璃の鏡を見て、映姫は溜息をつく……
そこには『鎖に縛られた異形』が映っていた

「それにして、本人も気が付かなかった本性がコレとは……凄まじい神気が抑えきれてませんね。」

　浄瑠璃の鏡に映る異形からは、気が消えてしまいそうなほどの神気が溢れていた
そこに映るのは、模造品の筈なのにそれだけでも十分なほどに恐ろしかった
この異形を、神狩りを呼んでも差し支えない程だった
程なくして、鎖に縛られた異形は霧のように消えた

「さて、お仕事に戻りますか……あ、そういえば説教をしてませんね。　後で小町あたりでもしましょうか……フフッ」

踵を返し、その場を去る映姫……後に残ったのは、神気溢れる鏡と部屋だけだった

第一話　【男、幻想となる】（後書き）

次回予告

「どこだよ此処……？　な、なんじゃこりゃ～～～～～～～～～？！」

次回【幼き者？】

いや、戦闘どこいったって？
そう言われましても、違和感が第零窮極封神兵葬？シャイニング・トラペゾヘドロンだったもので……その内ありますって。

次回もお楽しみに（；・ω・）ノシ

第二話　【幼き者？】

気が付いたら川を流れていた……背泳ぎするようにと言うより、上を向いた水死体のような感じである
先程から四肢が動かそうにも動かないのだ、既に何回か岩に頭をぶつけている
幸いなのは、タンコブになってなさそうである事だが、川の水が体を冷やしている為、麻痺している場合もある
わかっているのは、なんかもうどうでも良くなって来ている事だろう
水の冷たさで頭がおかしくなってしまっているのだろうが

「……」

なんとなく、周りの景色が速くなっている気がする
嫌な予感がする其しかしない、いや待とう可笑しい、いきなりデッドエンドは物語的にやばいんじゃ（ｒｙ
頭がヤバイと現実逃避せずに認識仕切った結果

「え？　は？　なっ？！」

凄まじく高い滝、途中途中で延びる青々とした木々……ああ、素晴らしいが今は全然嬉しくない……何故なら

「ぐにぁぁぁぁぁあ〜〜〜〜っ？！」

滝から紐無しバンジー……所謂、落下したのだ
憐れ、私の人生はここで終わってしまった……なんか、落ちる際に
見えた俺の体は小さく見えたが
俺の意識は、ブレーカーが落ちたようにブラックアウトした

―――――――――――――――――――――――――

「あ……ま、……まで……」
「……、起き……で…よ♪」
「そ……ぁ……」

なにか、会話が聞こえる
若い女性二人が談笑しているような調子である
ただ、片方は何か不都合があるようだ……どうしたのだろうか？
だが、俺はまだ起きたくはない
何故なら、モフモフする極上の抱き枕を抱いているからだ
最近まともに寝てないんだ……惰眠位貪らせろコンチキショウ

「意……戻……いみ…いで……が何…また……」
「知る…無…じ……い、今…気…つけ……い、もみ…」

ああ、眠い……体が言うことを聞かない、眠い……寝よう

――――――――――――
――――――
――

突如、天狗の治める土地にある滝から落ちて来た人間の少年……
とにかく特殊だった
見た目はただの人間なのだが、鶴の一言ならぬ長に当たるクラマテング様の一言で保護する事になってしまった
川の水を飲み過ぎたのか、未だに水が口から出て来る事があるが、1番危険なのはこの時期川の水は冷たい為、体の熱を奪われて衰弱しているのだ

「このままでは仕事に支障がきたしますね……椛、貴女のその尻尾なんとかなりませんか？」
「そんな事言われましても……てか、普段私に仕事を押し付けてるんですから真面目に働いてくださいよ。」

その人間の少年は、ある人物？にくっついている……『犬走（イヌバシリ）　椛（モミジ）』
……の尻尾にくっついてる
至福の表情でくっついている為、剥がすに剥がせない
9歳程の少年が至福の表情でくっついている……ショタコンには堪らないシチュエーションだが、生憎椛にはその気はない為おいしくない
ちょっとかわいらしく見えるが……ないったらないのだ

「クラマテング様も良いとおっしゃっているんですから、私はまと

まった休暇をのんびり過ごしますよ。」
「ぐぬぬぬ……このガキがいなければぁっ！！」
「ちょっ、文さまっ？！」

勘忍袋の尾が切れた……というかかなり自分勝手な理由で椛の尻尾に襲い掛かる天狗の少女『社命丸（シャメイマル）　文（アヤ）』は、突如吹き飛ばされる
少年に向かって振られた芭蕉扇は、真空波を伴う烈風を吹かせるが、少年を護るように現れた謎の障壁で弾かれる
弾かれた烈風は、そのままお返しとばかりに文に向かって吹きすさぶ

「へ？　きゃっ！？」
「あ、文様っ？！」

自業自得と言うべきなのだろうか……幸い、大事にはなっていないが服のアチコチが裂け、少し痛々しい

「な、なんですか……今の」
「わ、私にもさっぱりですよぉ……」

こうして、椛の尻尾に謎めいた少年は、椛と文の二人の間で謎の物体X扱いされるようになった
一部の天狗には、草木に留まる『蛹（さなぎ）』のようだと言われているが、こんな調子で三日ほど過ぎたのだった

―――――――――――――――――――――――――――――――

幻想郷と呼ばれる場所の一角……雄理が蛹みたいになっている天狗の滝の近くに天使の輪のような光が起きる
そこから、人型の『ナニカ』が降り立つ
そこにいるだけで神々しいまでの気配、対峙するものはそれだけで腰がくじけるだろう
それは、辺りを見回すと滝の中腹に目を付ける

『ミツケタァ……ＡＧＩＴΩォ！！』

それは、確かな憎しみ、混じり気の無い憎悪
主の怨敵を見つけたそれは、ゆっくりと目標を目指して歩き出す
怨敵の名は『ＡＧＩＴΩ（アギト）』……創造主に反逆せし顎であり、安らぎの闇を破壊するものだった

―――――――――――――――――――――――――――――――

感じる木漏れ日のような温もり、体全体に感じるモフモフとした感触……寝起きとしては完璧
これで完全な仕事をしなくては仕事人の名折れも辞さないだろう
名声も富もあったが時間が無いのが辛かった為、ここいらで一休みも悪くはない

「どこだ……ここは？」

凄まじい悪寒、そして悪夢に否応なしに起こされる雄理……辺りが慌ただしい
そして、感じる明確な『憎悪』と『憤怒』
人が出す粗削りな剥き出しの感情ではなく、研ぎ澄まされた刀剣のようなイメージ
なにより、頭の端にチラチラと『見える』ヴィジョンが頭を支配する
挽き肉のように蹂躙された羽の生えた人達、蛆虫を掻き出すような怒り心頭の表情の怪人、その怪人に無惨に殺されている自分
三人称視点が直の事ムカつく、許せるか、諦められるか、放置しておけるかこんな理不尽
徹夜明けでボロボロの自分に何が出来るか分からない、だが動かずにいられないし、立ち上がるしか出来ない
立ち上がり、ふとある事に気がつく……
空気が凍り付いたように止まっている
胃の奥がムカムカとし、頭の裏側でガリガリと五月蝿い
気に食わない、ムカつく、『敵』が居る……その思考は獣のような本能の塊だった
雄理が始めて闘いに赴く理由……それは、自身の中にある不快感を取り除くためのなんとも味気無いものだった

彼は『闘う』と言う選択肢を選んだ……未来永劫、過去永劫、戦い続けるしか無い悲しい選択肢を選んだのだ
だが、きっと雄理は変える事を……選んだ事を後悔する日は来ないだろう
男とは、皆身勝手生き物だから……誰かが傷付いて黙っていられるほど利口じゃないだけだった

第二話　【幼き者？】（後書き）

キリが良かったので焦らした、だが私は謝らないっ（キリッ

いえ、ホントにキリが良かっただけですよ？

第惨話　【猛る者】

異形……異質というべきなのだろうか、『ソレ』はなんの感慨も無く虐殺を繰り返していた
辺りに転がる獣のような妖怪の無惨な残骸、ソレが歩いた道は血の道と化していた……ソレの姿は正に『怪人』
見る者全てに畏怖を与え、係わり合いを拒絶を本能で悟らせる
ソレは、怨敵に向かって吠えた……『ＡＧＩＴΩ』と

第二話　【猛る者】

何かがおかしい……頭が掻きむしるように苛々し、血が沸くように体を巡る
まるで炎に焼かれるように体がほてる
おかしい……ナニカが近付いている

ソレハ敵ダ……

……？　なんだ、今何を考えた？

敵ダ、怨敵ダ、仇敵ダ！
我ラノ仇敵ダ！！
破壊、破壊、破壊……殲滅破壊殲滅破壊殲滅破壊殲滅破壊殲滅破壊

殲滅破壊殲滅破壊殲滅破壊殲滅破壊殲滅破壊殲滅破壊殲滅破壊殲滅
破壊殲滅破壊殲滅破壊殲滅破壊殲滅破壊殲滅破壊殲滅破壊殲滅破壊
殲滅破壊殲滅破壊殲滅破壊殲滅破壊殲滅破壊………

思考が塗り潰されていく……純粋過ぎる憎しみに蝕まれ、雄理は思考がブラックアウトした

―――――――――――――――――――

ソレは突然現れた……幻想郷と呼ばれるこの土地に居る神とはまた違う意味での『神の使徒』……悪意は無い、代わりに感じるのは憎悪
侵入者であるソレを警告ないし排除を命じられた自分達なんて見えていないように歩みを進める
風を操る天狗の一撃も何事も無いように歩く……よく見れば、風はソレを避けていた、ごく自然に

「く、全く相手にされていないだとっ？！」
「一度引くぞっ！」

ソレの名は『ホークロード』……鷹の特徴を持ち、凄まじい視力と弓による長距離射撃、風を操る力を持つ存在
とある世界で『アンノウン』と言う一くくりで認識され『とある人種』を殲滅する為に生まれた殺戮する種族である

――――――――――――――――

少年は森の中を歩いていた……仇敵に向かってフラフラと目には光を写さず、足には靴を履いていない
幼子に森を素足で歩くのは辛い筈なのに、意に介さず歩き続ける
ふと、歩く先から何かが破裂するような音が聞こえる……二つの影が逃げるように飛び去る

『ＡＧＩＴΩ（アギトォ）……』

狩るものと狩られるものが出会う、ホークロードと呼ばれているそれは、何処から取り出したかしらない短剣を少年に投げ付ける
少年はそれをふらりとした軽く、最小限の動きでかわす

ホークロードは、無駄と悟ったのか二本目の短剣を構えたまま固まる……決定打になりうる隙を見つける為だが、少年は相変わらず千鳥足でふらふらしている
業を煮やしたホークロードは短剣を手に切り掛かる……意外と我慢弱いようだ

ホークロードは、必殺の突きを繰り出すべく最大加速で間合いを詰める
その時、不思議な事が起こった、少年……雄理は背を向けたのだ
表情を変えられないようだが、ホークロードはニヤリッと笑ったように見える……だが、それでは終わらなかった
雄理の心臓を狙った一撃は、雄理が身を屈めただけでしのぎ、ちょうど左肩を掠めるように攻撃が通り過ぎる
左肩に止まったホークロードの腕を掴み、『一本背負い』の要領で投げ飛ばす雄理……敵の勢いを利用した為、力をあまり使わずに済んだようだ

『ぐ……』

あくまでも投げ飛ばした先に視線を投げ付ける雄理……その瞳は正気ではなく、敵を殲滅するまで止まらない狂戦士のような狂気と狂喜を孕んでいた
自分の敵はまだ生きている、なら殺そう殺し尽くそう……ニタリとした粘液のような笑みを浮かべる雄理は、少年のような風貌には似つかわしくなかった

『ＡＧＩＴΩォ！！』

起き上がったホークロードは瞬時に手を弓のように展開し、羽をもいで作った矢をつがえ、放つ

「させないっ！」

だが、その矢は白い狼……白狼天狗の犬走　椛により切り落とされた『筈』だった
椛の隣を鋭い影が通り過ぎる
ダン、ズチャァ……
何かが矢により貫かれ、貼付けにされたような音が響く

椛の背後には、虚ろの瞳が白目を向いている死体がいた
少年程の背格好で心臓の位置に燻し銀の矢を撃ち込まれていた
そこからは赤黒い血がゴプリと流れ、口からも血が垂れている……
即死である
普通なら生きている筈が無い
なのに、ホークロードは二の矢を構えて放つ……今度は腹部に突き刺さり、樹木に縫い付けられる
憎しみの篭った瞳は、ホークロードに短剣を抜かせた
あまりに残虐かつ狡猾な光景に椛は腰を抜かしていた
自分に懐いていたように尻尾に寝ながらしがみついていた少年、それが何故か化け物と対峙し、無残に殺されていた
ホークロードは心なしか穏やかな表情になると、少年の前に行くと短剣を突き立てようとした瞬間、少年の後ろから乳白色の装甲に黒い下地の腕が延びてホークロードが持つ短剣を受け止めていた
そして、少年の腕もまた受け止めるように動いていた

『っ！？』
「あ、あれは一体……」

腕は、少年の腕に合わせるように動いていた
少年の腕がホークロードの腕を捻り潰すように動かすと、後ろから延びる謎の腕も捻り潰すように動き、ホークロードの腕を捻り潰し、引きちぎる
少年は、謎の腕を操っていれのだろう……体を貫く矢を引き抜くと崩れ落ちるように樹木から落ちると、のそりと起き上がり、『咆哮』をあげる
突如、少年は黒い光に包まれる
眩しい、なのに黒く深く……そして暖かい黒い光で溢れかえる

ホークロードは、憎しみの限りを込めて呟く……

『アァギィトォォオ！！！！』

それは、人類進化の先駆者……そう呼ばれていた筈の存在だった
だが、それは『違う』感覚がした……憎しみを占めていたホークロードの感情は、地面に崩れ落ちた少年に『親愛』を覚えたのだ
有り得ない、相手からは己の主の怨敵である筈のＡＧＩＴΩである筈
それに対して憎しみならまだしも、親愛など理解の範疇外だった

『……く、くぉぉお！！』

言いようが無い恐怖に駆られた……目の前の少年からはそれだけの危険があったのだ
確実に仕留めなければいけない、なら近接で確実に……短剣を構え、突貫するホークロード
だが、白い腕が再びホークロードの腕を掴み、阻止しようとする
しかし、ふらふらの状態では反応し切れず、短剣は……

「ごふっ……が……ぁ……」
『……っ？！』

人外の……怪物の一撃はさぞ子供には辛かろう
それが、『ベルト』によって阻まれていたとしてもだ

いつの間にか巻かれていた赤がメインカラーのベルト
中央に白い宝玉がはめ込まれ、その左右を翠と赤の宝玉が彩っている
鋭い短剣の一撃は、白い宝玉により阻まれ、結果として腕力と衝撃
だけで少年を悶絶させるだけに留まっていた……悶絶だけで済んで
いる辺り、少年も大概みたいだが

暫く腹を押さえて回復に尽力し、息を殺して死んだように見せか
ける
だが、敵はそんな事であっても確実に殺したいのか、近寄ってくる
頭に五月蝿いくらいに雑音／喧騒／絶叫が聞こえる
アレは敵だ……滅ぼせ、殺せ、殲滅しろと
五月蝿い……そんな事を言われなくても腹の痛みで分かっている

イラつく／ムカつく／腹立たしい

気がつくと、腰に巻かれてたベルトのような物を手を当て、体を
真っすぐとしていた
そして、天高く、声高に、宣言するようにその言葉を紡いだ

「変…身っ！！」

雄理少年の体は、再び光に包まれた……今度は、紛う事無き白い光
それは卵のように包み込む
卵は成人男性ほどになると、真ん中から黒い筋が生まれ、この粉々
に砕け散る
中から生じた者……それは、白色の甲殻に覆われた『何か』だった
黒い複眼は徐々に赤く染まり、血が通っているように見える
叩けば砕けそうなイメージを思い浮かべるが、無造作に立つその

姿からは一部の隙も無く、正に戦士だった
意識が朦朧としているのか、若干ふらついている
　ホークロードは、そこに付け込んで短刀を交えた一撃入れた……
筈だった
ごく自然な動作でホークロードの攻撃をいなし、丸め込め受け流す
とアッパーカットを入れる

『がっ！？？』

　だが、その悲鳴は白い戦士からだった
アッパーカットを放った拳はひびが入り、今にも崩れ落ちそうだった
少し怯んだ様子のホークロードが、裏拳気味に短剣を凪ぐ……
短剣にひび割れた装甲が当たった途端、『粉々』に砕け散ってしまった
　白い破片が辺りに雪のように散る……ホークロードが警戒を崩さずにいると、後ろから足音が聞こえる

ザク…ザク…ザク…

　草を踏み締めるような音が聞こえる……闇夜に浮かぶ二つの赤眼
深緑の鋭角の甲殻に白い破片が無ければ何者か分からなかったろう
この時、汗をかくならホークロードは大量の冷や汗をかいていただろう
自分が侵した過ちは二つ……得意の闇討ちを選ばなかった事
もう一つは……

『何がどうなっているかさっぱりだが、これだけはわかる……テメ

ェは敵だ。』

この男を一撃で殺せなかった事だ……

第惨話　【猛る者】（後書き）

ちょっとグダった内容で反省中
終わるのはたやすいが、始まるのは難しいとは誰の言った言葉だろうか

第四話　【異端者】

男……木野雄理は混乱していた
働いている病院の夜勤明けにいきなり殺され、気が付いたら幼児化していて、気が付いたら変な姿になっている
中々……いや、早々出来ない摩訶不思議体験である
某アンビリーバボーな番組に取り上げられる事間違いなしだ……が、その前に生暖かい視線を送る、やたら低姿勢で、潔癖な内装である、外からの鍵付き病室に入れられるだろう
とりあえず、今は色々と置いておこう……考えたらツッコミで大半の時間を浪費しそうだ

体に漲る力……うねり狂う嵐のような力が、目の前で呆然としている人外……一昔前に世間を賑わせた【未確認体】と呼ばれる存在に、かなり酷似している事を踏まえると、かなりやばい状況だろう
相手は殺人のプロ、こっちは昔に叩き上げで武術を叩き込まれ、しかし日頃の医者の夜勤という激務の為に、鈍りに鈍った外科医である
今ほど朝の鍛練を怠ったのを後悔した日は無いだろう

『あぁ……もう、考えるのは後だ……さあ……』

……お前の罪を数えろ……

『っ？！』

身に覚えの無い台詞が、不意に頭を過ぎったせいで、動揺する雄理……それを敵であるホーク・ロードが見逃す道理など無く、短剣

を必中コースで投げた『筈』だった

『あっぶねぇ……ナイフとか投げたらあぶねぇだろ？』
『ＡＧＩＴΩォ……』

獲物に向かって短剣を投げたと思ったら、いつの間にか獲物は後ろに居た……催眠術でも、ましてや時間停止でも無い
純粋なまでの『脚力』による疾走だった
その証拠に、地面に僅かに煙が立ち上るブレーキ痕があった

『じゃ、次はこっちの番だよな？』
『っ？！　が……は……』

その瞬脚は、山特有の腐葉土を巻き上げ、水分を含んだ地面は、あまりの摩擦熱に白い煙を立ち上らせる
これが雄理の……緑色のＡＧＩＴΩの力

【極端肉体】

その極端に進化した肉体は、神速の如く動きでホーク・ロードに肉薄し、腰をしっかりと据えた必殺の掌底を叩き込む
ホーク・ロードの体はくの字に折れ曲がり、軽く浮き上がる
止めと言わんばかりの踵落しが、浮き上がったホーク・ロードに叩き込まれ、地面にクレーターが生まれ、断末魔と共に爆散する
巻き上げられた腐葉土が宙を舞う……白い月が見守られる中、一人の戦士が勝鬨を上げた

その名は【ＡＧＩＴΩ　Ｅｘｔｒｅｍｅ】

勝鬨を上げたのは、半ば自棄に等しかったが、様々なモノに対して威嚇には十分だった

主に山に住む獣や、ＡＧＩＴΩを敵視していた天狗に対して……

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「どうしてこうなった……」

大人の男性の声ならいざ知らず、少年のショタ声では単なる歎きにしか聞こえなかった

大きな畳み張りの部屋に自分が寝かせられているふっかふかな布団が一つ

ぴりぴりとした雰囲気が無い所を見ると、誰かが監視している訳では無さそうだ

「俺は確か、森で倒れた筈じゃ「気が付きましたか？」……っ？！」

皆は想像出来るだろうか？　目の前に犬耳の少女が居る事を

白い毛並み……と言って良いのか分からないが、サッパリとした雰囲気と

親しみ易いほんわかとした雰囲気が同居していた

正直言おう、可愛いです……俺がこんな成りではなかったら、口説きに行っていただろう

犬耳？　人外？　バチコイデスガ何か？

「えぇっと、おはようございます？」
「ええ、おはようございます。」

あっさりと返されてしまった……人間的なコミュニケーションは取れ、しかも何故か和む
いかん、身長が低いが中はバリバリに持て余す２３歳独身なのが響いているのだろうか
新たな人間の境地を開拓してしまいそうだ……主に犬耳ｍ

「朝食の用意が出来たので行きましょうか。」
「……はい」

自身の状況を棚に置いておこう……今はご飯が食べたいです
何故か全身が筋肉痛のように痛く、更に腹が減りすぎて思考が飯にしか行かない
ここは、素直にお世話になろう

……
……
……

昨日の常識は今日の非常識なんて言葉がある
だが、このような状況で使うなんて言った等の本人も思っただろう
物凄く広い畳の居間に鎮座するとてつもなくデカイ『ナニカ』がこちらを見聞するような視線を送っている

それの目の前には大きな茶碗というか丼に飯が盛られ、大きな焼き鮭と大きな杯に入れられた味噌汁があった
そして、その対面するように人間サイズの同様の朝餉がある

「長が貴方と朝食を取りたいと申されております……ではっ！」
「ちょ……おまっ？！」

犬耳の少女は、部屋への襖を開けるとガチガチに緊張し、簡単な事情を言うと後ろに向かって全速前進していた……いや、こんな怖そうな人？のところに置いておかないでくれ
不安な表情を察したのか、大きな奴が声をかけて来た

「客人よ、別に取って食う訳では無いのだ。　怯えずともよい。」
「は、はぁ……」

あっけらかんとした……軽い表情で笑いかけてくる男、多分体格や腰周りの股関節的に男だろうが
つい、今まで感じていた威圧感は消えてなくなり、代わりに朝日がうっすらと部屋に差し込む爽やかな朝餉を食す空間と化していた
この変容を、たった一人の男によって生み出された事に、戦々恐々としながら、男と対面するように置かれた朝餉の前に正座する

「さて、募る話は腹を満たしてからでも遅くは無かろう……」
「は、はぁ……」
「い、「いただきます」……」

結局、完全にペースを掴まれたまま話が進む事になってしまった話のイニシアチブを取れなかった事を、少し残念に感じながら、朝餉を食べる事にした……【腹が減っては戦は出来ぬ】とは、良い言葉だなと思いながら

……

……

……

……

……

塩気が強すぎず、所謂美味い味噌汁を飲みつつ、逆に塩気が効いて食と茶が進む焼き鮭をおかずに、しっかりと食感がある白米を食す……すべてにおいて最高、ベターではなくベストの朝餉に、夜勤明けでまともな食事がパスタだけだった事を思い出し、不覚にも涙を流したのは裏話

男も雄理も既に食べ終え、改めて佇まいを直して向かい合う二人

「さて、何から話すかな……」

「あ、あの……一つ、質問いいですか？」

「む？　何かな？」

腹が満たした為か、頭の巡りが少し悪くなっていたのだろう……素直な気持ちで話を切り出した

「何故、見ず知らずだろう俺に、こんなに良くしてくれるんですか？」
「聞きたいかね？」
「……はいっ」

見た目が子供の為だろうか、長と呼ばれた男は、まるで孫に語りかけるように口を開く……雄理はガチガチに緊張して分かっていないようだが

「君が私の古き盟友と同族……ＡＧＩＴΩだからだよ。」
「まあ、アギトですか……」

アギト……こんな短い期間に耳にタコが出来るくらいに聞いた単語だ
【顎】の別の読み方だと知っているが、そのままの意味ではないだろうと辺りを付けている
だが、意味などどうでもいい……この言葉のせいで友人に殺されかけ、昨晩のように人型の異形に殺されかけた……踏んだり蹴ったりだ、とばっちりも良いところだ

「君は納得できないだろう……だが、私は盟友に助けられ、そして今こうして彼の同族と話をしている……これは何かの縁だと思わないかね？」
「多分、そうでしょう……貴方の盟友のおかげで、こうして死なずに済んだ……ですが、俺は【あんな姿】になんて……成りたく無か

った……」

昨晩、変化した緑の怪人……馬鹿げた速度で敵を翻弄し、これまた馬鹿げた筋力で敵を薙ぎ払う……前に、小児科の手伝い（給料出ると詐欺られた）で子供の相手に良く絵本を読んだが、あの姿はまるでお伽話の悪い竜のようだ

理不尽なまでの力で全てを奪い、空虚な杯を片手に空虚な玉座で踏ん反り返る暴君とも言える

雄理の表情が暗いことを察した長は、やれやれしょうがないかとため息をついて言う

「しかし、まあ……あれだ、いきなり過ぎて困っているだろう。暫く此処に泊まると良い。」

「……ありがとう……ございます。」

複雑な思いを胸に、雄理の道は始まった――【あんな姿になんて……成りたく無かった……】――呪縛のように広がる言葉、言葉は慈しみ、哀しみ、悲劇と喜劇を産む……だが、それはまだ先の話

第四話　【異端者】（後書き）

序章が閉幕しました……次からは、第一章【幻想】となります。

軽い解説←

【ＡＧＩＴΩ　Ｅｘｔｒｅｍｅ】
　極端な進化をするＡＧＩＴΩ
一長一短な性能が特徴

次回もお楽しみに（，・ω・）ノシ

第五話　【目覚め】（前書き）

■１１／０１／０５：一部の誤字脱字を修正しました。

第五話　【目覚め】

天狗の方々に、世話になって早二週間……朝に起きて、体を動かし、他の天狗と朝食を食べ、仕事を手伝い、飯を食ってと言う半ば、ローテーションと化した日常を過ごした

自分のいる場所は、【幻想郷（げんそうきょう）】と言うらしい……
なんでも、妖怪の賢者と言われる
【八雲（やくも）　紫（ゆかり）】
がこの地を護る巨大な境界を作り上げ、現代に【忘れ去られたモノ】の為の
楽園を築こうとしたのが始まりなんだと

それを聞いた俺は、一人落胆していた……忘れ去られたって事は、仮に俺が元の場所に帰れたとしても、誰も俺を覚えていない……ということだろう
それが、俺の背中に氷柱を差し込むような冷たい感覚をもたらす

働いていた医院長も、看護長も、看護士達や同僚や先輩の先生達も俺を覚えていない……いや、多分薫おじさんも忘れているに違いない
その、確かめようのない事実が、何故かどうしようもなく心を打ちのめす
気持ちは落ち着き、頭は理解したが、やはり寂しい……手伝える仕事が無くなると、次第に最初に【奴】を倒した森に足を運ぶようになった

野性の妖怪が居て危ないらしいが、会ったことがない為、気が緩んでいたのだろう……それがこの様だよっ！！

「うぅぅにゃぁぁぁああ？！？！」

『ぐぉぉおおお！！！』

絶賛逃亡中……恐ろしきは、幼い故に尽きることのないスタミナと向こう見ずに走るノータリンな気合いだろう

そろそろ一時間くらい走っていた気がする……精神って肉体に引きずられるんだね？

お兄さん知らなかったよ……（ｂｙ作者

第五話　【望郷】

昼頃からエクストリームな鬼ごっこが始まり、現在沈みかけの夕日……いや、ねぇよ

「ぜ……はぁ……ぜ……はぁ」

過呼吸寸前の呼吸を無理矢理整え、冷酷なまでの現実を受け止める

逃げ切れない……大人の体なら、木の上に登るとかして、相手の死角を突けるだろうが、今は皮肉なまでに子供だ

木の幹に取っ掛かりが少なく、子供の体では登るに登れない

万事休す、絶体絶命……追い詰められたブラット・ピットはこんな気持ちだったに違いないと意味不明な思考になり出した頃、女神はやって来た

「まったく、こんなところに居たんですか。探しましたよ、雄理君？」

「椛さん……マジ天使。」

最近、俺の中の椛さん株がストップ高である
彼女の上司は、常識と言うか良心が欠如している傾向が見受けられるが、彼女はマジで俺の天使だ
羽が黒かろうと犬耳が生えていようと関係ない……彼女は俺の天使だ

「さて、帰りますよ？……ぁ」

「あぁ……ぁ……」

いつの間にか居た妖怪……コイツはあろう事か、椛に爪をたてやがった
頭に血が急激に上る感覚に、目の前が白に……灰色の染まった

――――――――
――――――
――

……感情ノ【限界突破】ヲ確認

……覚醒者ノ肉体交換ヨル修復ヲ終了シ、覚醒者ノ【力】ヲ四〇%解除

……【ＡＧＩＴΩ】――覚醒確認

……歪メル者達トノ戦闘ヲ開始サセル

――

――――

――――――――

Ｓｉｄｅ－Ｍｏｍｉｚｉ

「……椛っ！？」

私は夢でも見ているのだろうか？
小さくて、守ってあげなきゃいけない、と思っていた子が、大きくなっている
黒で統一された服装が引き締まった印象を与え、伸び放題で、少しだけ白髪の混じりの髪は夕焼けを美しく反射している

「……い、だ……か……みじっ？！」

灰色の幕のようなモノが雄理君を掠ったと思ったら、雄理君の面

影を残した若い男性が現れた
彼は倒れた私を見るや否や、駆け寄って抱き寄せてくれた
弟みたいに思っていた少年に近い仕種と、彼特有の少し温かい体温が、彼が雄理君だと私に確信させると、私は意識を閉ざした

Ｓｉｄｅ－Ｏｕｔ

――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ－Ｙｕ－ｒｉ

「おい、大丈夫か……椛っ？！」

よりにもよって、俺を庇って椛が倒れた……その事実が俺を打ちのめす
頭の中は、グラグラと煮えたぎるように血が上るが、嫌に冷えていく

【いいか、心は熱く……頭は常に絶対零度に……じゃ。　魂に刻め馬鹿弟子。】

ムカつく事に、俺に『業』を仕込むと称し、リンチをしたある男の言葉を思い出す
中学の頃から、動作の入りと抜きから、徒手空拳までの全てを叩き込み、高校を出る時に満足した笑みを浮かべて死んだ祖父の事だ
薫おじさんも暇人じゃない……遺産管理をしたら、さっさと自分の実家……父の実家に預けて行方を眩ませたのだ
短いようで長い成長期を、厳格な祖父の元で育った俺は、一部から『ツンデレ』なんて言われるようになっていた

そんな、忌ま忌ましい記憶を、絶対零度の精神で縛り付け、目の前の畜生を惨殺する方法を考えていたが、自力が違いすぎる事を痛感している

【己の枷を砕いてしまえ】

そうだ、何を括っているんだ……人間で敵わないなら、人間で、無くなってしまえば良い

【しかし、それは修羅……いや、悪鬼羅刹の道だ】

躊躇なんて捨ててしまえ、この身に余る力さえ、全てを捩伏せてしまえ
迷いなんて捨ててしまえ、そんなもののせいで、一体何人見殺しにした

体から、ゆらりと立ち上る陽炎に身を包みながら、雄理は高らかに宣戦布告した……過去に、未来に、そして現在(いま)に

「変……身っ！！」

腰に現れたベルト、中央に緑の宝玉をはめ込まれ、黒い下地に白い表皮を持つ

右脇には朱い宝玉、左には中央と同じ緑の宝玉を持つ
そのベルトを基点に、閃光が雄理の体をなめ回すように広がり、包み、体を『作り替え』ていく
次第に、雄理という男の体は、一人の戦士……『ＡＧＩＴΩ　Ｅｘｔｒｅｍｅ』という存在になっていく

『さあ……お前の罪を数えろ……』

もう、違和感も、躊躇いも、何一つ感じはしなかった
この拳を奮い、障害を砕き、敵を砕き、己さえも砕く
もう……力を奮うことに躊躇いなんて、感じはしなかった

―――――――――――――――――――――――――――――

ＡＧＩＴΩと妖怪の戦い……ハッキリといって、一方的にすらならなかった
たった一撃の拳で、先程まで、雄理を脅かしていた妖怪は昏倒し、小刻みに痙攣しながら泡を吹いている

『こんな……もんか……』

微かに血の付いた拳を見ながら、異形になった雄理は、落胆していた
うろ覚えではあるが、黒のインナーに緑の装甲の姿は、白い姿の時に比べ、馬鹿みたいな筋力を発揮していた

だが、今は溢れ出るような力は一切感じられない
感じるものは、倦怠感と、頭蓋を揺らした時に残る奇妙な感覚
喧嘩をした時に感じる奇妙な爽快感なんて、そこには無かった

体を包む奇妙な倦怠感に押される形で、雄理は変身を解く
ぺりぺりと外殻は剥がれ、風が黒い下地を晒し、つむじ風に煽られるままに人としての姿に戻る
力を得た充実感なんてものは無く、そこにはけだるそうな青年…
…雄理と、血が流れてこそいるが、致命傷を負わずにすんだ椛が居た

その後、雄理が椛を背負って天狗の里に連れて帰ったが、青年＝雄理と判別できるものはおらず、椛が起きるまで一波瀾あったようだ……

第五話　【目覚め】（後書き）

そろそろ年末ですね……積みゲーを消化していたら更新忘れていたなんて、口が裂けたって言えませんよ（笑）

うぐぅ、静電気が辛い時期になりました

皆さんは以下にお過しでしょうか？

私は、部活で頭の汗（脳汁とも言う）をかいています（；´Д`）ゞ

モンハンを買って、年が越せそうな感じがするので、私としては嬉しいですが、それよりも．ｈａｃｋ／／Ｌｉｎｋをクリアしなくては……ハセヲの初期のヘタレ気味にニヤニヤしています

では、またの更新の時に……

第六話　【旅立ち】（前書き）

毎回短い更新で心苦しいでござるが、上手くまとらないのでござる。

第六話　【旅立ち】

力……本能で扱っているため、完全にモノにしているわけではないが、力を手に入れた
大嫌いなモノ第二位くらいに入る【強すぎる力】という力が

第六話　【旅立ち】

荷物と言えるモノも無く、どうすれば人里に行けるのかを聞き、着の身着のままに旅の為に準備をする

「あの、本当に行くんですか？」
「あぁ、あんまりのんびりしていると、怠け者になっちまいそうだからね。」

苦笑を浮かべ、頬を掻いて恥ずかしさをごまかす雄理……凄く、残念ですって表情を浮かべている少女
いや、そんな顔をされても出ていくのは予定調和であり、『あの姿になれるようなった時』に決めていたことだ
あんな異常過ぎる力（ＡＧＩＴΩ）を狙っている連中が少なくても、一つのグループは居て、尚且つ昼夜問わず狙っていると考えていいだろう
だからこそ、ここ（天狗の里）に迷惑はかけ続けられない
何より、しがらみの無いこの土地を練り歩いてみたい気持ちも無い

ことは無いのだが

「見送りはいらないよ。　多分、暫くしたらまた来るだろうし。」
「そう、ですか……お姉ちゃんに頼りたかったら、いつでも来て良いんですよっ！！」
「ぶっ？！……お、お姉ちゃんと来たか。　分かったよ、またな『姉ちゃん』（まあ、悪くは無いかな……なんで請うなったかは知らんが。）」

一人っ子だった雄理は、『姉』と言う新鮮な響きにどぎまぎしながら、幻想郷に足を踏み出す

――【全てを受け入れる土地】へと……

――――――――――――
――――――
――

「道に迷った♪」

雄理が天狗の里を出て約４時間半
清々しい程の笑顔で、今の現状を呟く
もう、テンションで台なしである
今なら、雄理に対する千年の恋も醒めるだろう
彼は今、二つに別れた道の前に居た
片方が人里に通じるのだが、もう片方は素晴らしいほどにデンジャ

ラスな場所に通じてるのだとか

「わ、分からん……椛の嘘つきめ、立て札どころか、分かれ道自体が無いじゃないか。」

最初は、広い街道を歩いていたはずなのに、今は薄ぐらい森……
いや、樹海と形容していいような場所にいた
しかし、それもこれも雄理の【きっとこっちが近道だろう】と言う方向音痴に良くある駄目な思考が原因だとここに明記しておこう

「どうするかな……さっきから感じる餓えた野獣のような視線も気になるし。」

この辺りにも、野生の獣がいるようで、狙われているの殺気で分かる
そもそも、気配が分かるなんて医者に必要な技能なのだろうか？
堂々巡りの思考に陥る手前、不意に視界が広がる
どうやら、歩きながら考えていたようだ
視界に映るのは、綺麗に掃除された神社
石畳が美しく、先程まで鬱陶しく見えていた木々の緑も、現金な事に美しく見える

「凄いな……よし、拝んでくか。」

先程まで感じていた殺気は、境内に入った途端に途絶える
澄んだ空気に、深くにも気後れしてしまうところだった
日本人は、古来よりこれを【畏れ（おそれ）】と言った
人によって様々だが、何故か畏(かしこ)まってしまったり、敬ってしまう気分になる事だ
雄理は、神社の大きな鐘を鳴らし、手を鳴らして礼を払う
賽銭が払えない（雄理は無一文）為、敬意くらい払わないといけない

「凄い社だな……落ち葉も見当たらないし、何より……」
「あれ、参拝のかたですか？　下の社でも良かったのに信心深いかたなのですね……あれ？」
「「……え？　なんで……」」

社の後ろから現れる緑色の長い髪の少女……彼女は、俺を見て笑顔を浮かべたと思ったら、急に表情を変える
俺も【見覚え】のある顔に思わず指を指してしまう
彼女も俺を指を指してくる

「「なんで居るんだよ（ですか）……」」
「早苗っ！」「ゆう君っ！！」

先程までのシリアスは吹き飛び、驚きと信じられないという感情が声色が覗く
絶対に会わないと思っていた男と会って驚く少女と
急に消えた少女が、目の前に現れて唖然とする男

幻想郷……そこは忘れられた筈の存在が住まう場所
少女と男は、果たして忘れられたのだろうか？
それとも……

第八話　【御柱】

森に佇む神社、そこで語らう少女【早苗】と男性【雄理】……お互いに楽しそうであり、お互いに悲しそうであった
再開の喜びしかり、俗世間に忘れ去られてしまっている事しかりとにかく、話す事は尽きなかった
気がつくと、日が沈みだしていた

「いけない、もうこんな時間……今日は泊まっていって下さい。明日、人里に案内するので。」
「いや、助かるよ……実は野宿を覚悟していたからさ。」
「ふふ……相変わらず、方向音痴なのは変わらないんですね。」
「うっせ……ふぁあ……眠くなってきｔっ？！」

自分の古くからの弱点を突かれ、ふて腐れる雄理とそれを見て笑う早苗
まったりとした雰囲気の中、雄理の第六感が告げている――――狙われている――――と

「早苗……中に入っていろ。　狙われているようだ。」
「そんな……だったら私も……」
「いいから、飯の準備をよろしくな？」
「はい……怪我、しないで下さいね？」

リア充蒸ｈ……違う違う

　此処で、二人の認識に差があった
幻想郷では、基本的に揉め事は肉体言g……果たし合いで決めており、そのルールとして【スペルカード】略してスペカが使われる
　弾幕をはり相手を追い詰め、時には相手の弾幕をかい潜って戦う中々ポピュラーな遊び（作者は断じて、断じて認めたくないが）である
どれほどポピュラーなのかと言うと、男子では砂場遊びや鬼ごっこ、女子では昼ドラおままごとなどだろう
　しかし、悲しかな雄理にはそんな常識は知らない
雄理が幻想郷でしてきたモノは、全てが弱肉強食の【殺し合い】である
じっとりとした脂汗が、背中を伝う程の殺気を感じる中、雄理はこの格上の相手を以下に仕留めるか考える……
　まず、早苗に被害は出したくないと外に出て、石畳の上で足を調え、呼吸を整える
いつ、敵が仕掛けて来ても良いように迎撃の構えを取る
風の音を素直に感じて捕らえ、風切り音の一つも逃さぬように目を閉じ……そして

ヒュ……

「馬鹿正直に真っ向からかっ！！」

　何かが目の前に現れた為、渾身の掌打で迎撃すると、そこには【巨大な柱】があった
人間より遥かに巨大な大きさであり、こんなモノが神社に当たったら堪ったものではないが
それより驚いたのは、うっすらとした【緑の腕】が自分の腕をトレ

ースするように現れた事
そして、いつかのベルトが現れると、そのフレーズを口に出す

「変身……」

すると、先程までズレていた緑の腕と、雄理の腕が重なり、一つの腕になる

夜闇に浮かぶ、赤い二つの複眼

月光に照らされる、深緑の肉体

刃のような器官が目立つ腕

極端進化の内、【極端肉体】に冠する者……人呼んで『サイクロンフォーム』である

木製の巨大柱を、掌打の衝撃だけで粉々に砕き、小さな木片に変えていく

圧倒的なまでの暴力に、制御が利かない雄理は、『っち』と舌を打つ

その後、次々とやってくる柱を、回し蹴りや踵落し、フックやストレートなどの喧嘩殺法で仕留めていく

『くっ……なんだ、この爆撃のような攻撃は……ここは、紛争地帯か何かかっ！！』

最後の駄目押しの如く巨大な柱を無拍子のような無駄の無い動き

で仕留める
昔、武術のようなものをかじっていたとは言え、ここまでいい動きが出来たかなと疑問に感じ出した頃、『ソレ』は現れた

「ほぅ……ただの人間かと思えば妖怪変化の類とは恐れ入った。なんのつもりで早苗に近付いたかは知らないが、貴様をここで始末してくれる。」
『（あれ……なんか……スッゴい飛んで来た柱に似た物を持った人が、こっち睨んでる……しかも、なんか嫌な予感が……）』
「くだばれ、この化け物めっ！！」
『……っ？！』

バけ……モノ？　誰が？　俺が？　なんで？
なんでそんな事を言われなければイケナイ？
仕掛けて来たどっちだ？　アイツだっ！
奇抜なファッションのアイツだっ！！
なら……【ぶっ飛ばせば、良いじゃないのさ？】

化け物と言う事を突き付けられ、雄理のガラスのハートが粉々に粉砕しかけるが、何かの防御機構が働いたのか、化け物呼ばわりした、目の前の腐れ外道を、文字通り【蹴散らす】事を決めた
ふくよかな胸が目立つ赤い服に、長い濃紺の膨らみ気味のスカート、背中にしめ縄に柱と奇抜を通り越して奇っ怪なファッションセンスの女に、化け物呼ばわりされたくは無いと、生身なら井の字を頭に浮かべるように青筋が浮かんでいるだろう
別に、雄理のエセ探偵姿も胡散臭さ満点２０点なのだが、そんな事を棚に置いているのか、はたまた頭に血が上っているのか……少なくとも、この茶番（ファルス）を止める者は、誰ひとり居なかった

「（ゆー君、成長したなぁ……身長伸びて、体も逞しかったし、夢だって言っていた外科医にもなっていたし……はぁ……）」

止められそうな者がただ一人、凛々しい雄理の対応に、乙女していたのは、絶賛死闘中の二人にとって、不幸には違いないだろう

―――――――――――――――――――――――――――――

轟　轟！　轟ぉ！！

鳴り響く衝突音、例え１０ｔトラック同士を最高速でぶつけ合ったとしても、ここまで凄まじい音はしないだろう

雄理の右フックを、バックステップでかわした女は、凛とした雰囲気を醸し出す……まるで神だと言わんばかりの雰囲気を

「ふん、化生の分際で、神に抗うたぁ良い度胸だね、アンタっ！」

『神？　神だと？　笑わせる……早苗が耳にタコが出来るほどタケミカナタの話をしなければ、日本神話すら知らなかった俺に神を気取るとは、頭が腐ったか？？』

「調子に乗るなよ……妖怪風情がっ！」

Ｓｉｄｅ―？？？

【神祭『エクスパンデット・オンバシラ』】

収束され、今までのただの御柱ではない、必殺の一撃の如く威力！
早苗に近付く妖怪を倒したっ！　護ったっ！　第三部完！！　静かに心の中でガッツポーズを取ったら、突如、背中に氷柱をぶち込まれような寒気を感じた
『奴』がいる足元に、見慣れない紋様が現れた、右足に吸い込まれると、私は感じた

【殺される】

それは、神殺しの一撃……先程まで驕り、高ぶっていた私を地の底にたたき落とす神罰の如き蹴り
御柱が粉々に砕け散ったのをみると、私は意識を手放した

Ｓｉｄｅ－Ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ－Ｓａｎａｅ

「神奈子様達、遅いですね……ゆー君も遅いですし、見に行きますか。」

久しぶりに会った、高校時代の友達の一人である『木野（きの）　雄理（ゆうり）』君……特別勉強が得意でも無く、運動は空手部に助っ人に呼ばれるくらいなのに本人はやる気がない……ぶっきらぼうだけど、頼られると断れない損な性格をした、私の憧れの人
彼が、２３歳になったと聞いた時には驚いてしまった……私より高かった身長は浚に差が開き、夢だった外科医になれたそうだけど、

いつの間にか幻想郷にいたそうだ……幻想郷にいるという事は、彼は外界から忘れ去られてしまった、ということなのだろうか？　それとも、境界を操るという妖怪の賢者の仕業？
邪推は止まらず、頭を振って一度頭を冷やす……彼は言っていたでは無いか、『凡雑な答えなら幾らでもあるが、残酷な真実はいつだって一つはある』と
だから、頭に血が上ったら、一度思考を置いてクールダウンをすべきだとも言っていた
……だから、入口でギャラリーしている諏訪子様と、緑色の変身ヒーローとガチ喧嘩している神奈子が居る訳無いと

「……いつだって、世界は『こんな筈無かった』と言う事ばかりだなぁ……」

とりあえず　早苗は　幻想郷なのに　現実逃避を　試みた

【神祭『エクスパンデット・オンバシラ』！】

しかし残念、荒れ果てた石畳、吹き飛ぶ崇拝し、敬愛する神、そして……無慈悲に御柱を破壊する緑色の怪人
だが、神奈子が倒れると同時、怪人は倒れ、早苗がよく知る人物、木野雄理であった……早苗は、思考が止まった

――――――――――――

――

「ようするに、神奈子様がゆー……雄理さんを襲ったのは、勘違いからなんですね？」

「わ、悪かったとは思うよ……にしてもまさか、早苗の友達がこんなでかくなっていたとはねぇ……（それに、何故か戦場を渡り歩いた奴独特の感覚をもっているな、コイツ……昔、賽銭入れに来ただけのガキとは大違いだ）。」

「私も驚きました……まさか、外でそんなに時間が経っていたなんて思いませんでしたし……歳に結構差が……うぅ……」

神奈子と早苗が、話をすり合わせていく中、体の至る所に、痣や擦り傷をこさえた雄理を、布団で寝かしている

オンバシラを粉々に砕いた足に至っては、パンパンに腫れている……明日は筋肉痛を越えた痛みを味わうだろう

「最後の一撃……私の神性が霞むくらいの力を使い、真っ向から私を仕留めた……多分、力を制御をしてないせいで、かなりの力をロスしているだろうね。」

「はい……あれはもう、人間の範疇を越えています……（ゆー君、離れる前は普通だったのに、何があったの？）」

二人が見守る中、名前と仮面を捨てた英雄は、ただ静かに眠る……来たるべき、決戦に備えて

第八話　【御柱】（後書き）

仮面ライダー映画をみましたが……おやっさん、渋過ぎますっ！
タジャドルや、第六のグリードらしき名前とヤミーの傾向もわかったので、見てよかったです。

今後の展開？（前書き）

とりあえず、意気込みとここまでは考えているよ～って奴です。更新じゃなくてごめんなさい。

今後の展開？

これは、一人の男の話・・・・・・

――「貴方はね、『救済』する為に生み出された『仮面ライダー』という名の『装置』なの。」

苦悩し・・・

――「俺は……ヒーローなんかじゃない……」

葛藤し・・・

――「それでも、いずれ貴方は『世界』に取り込まれる。　それでも、貴方は戦うの？」

選択を奪われ・・・

――「例え、俺という存在が殺すだけのガラクタに成り下がろうとも……闘わない言い訳にならないじゃないか。」

それでも、道を探し・・・

――「いいわ、なら受け取りなさい。　貴方の力を……風の力を。」

時には、誰かに助けられ・・・

――「俺は、お前らを許さない……変身っ！」【Ｃｙｃｌｏｎｅ】

時には、誰かと敵対し・・・

――「お前か、世界の破壊者っていうのは？」「ほぅ、そういうお前は？」「俺か？俺はな……」

男は、仮面を脱ぐために戦う……誰かの為ではなく、自分の為に生きるために・・・

――「かつて、仮面ライダーなんて呼ばれていた男だよ。」「いや、名前を名乗れよっ！」

男は……青年は、声を頼りに旅をして、答えを探す物語に……私はしたいです・・・

・・・ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

今後の展開？（後書き）

暫く、監督提督氏との合作（著：私、監督：監督提督氏）の『インフィニット・ストラトスー機甲英雄伝ー』で、描写とかの練習や勉強、話の練り方を勉強してきます。
少しの間……結構の間、お休みしちゃいますが、きっと私は帰ってきます。
では、いってきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2155o/

Ａ－幻想と仮面の英雄－

2011年6月29日23時21分発行